

## 西郷局の従姉妹「お国」一家の没落 ＝『お国文書』全4通の考察＝

Study on Fall of Saigo no Tsubone's cousin by Okuni Documents

中山 正清  
Masakiyo NAKAYAMA

(平成28年10月4日受理)

### 【要旨】

静岡県掛川市の上西郷地区に伝わった4通の『お国文書』については、これまでほとんど本格的な研究が行われていなかった。『静岡産業大学情報学部紀要』第18号掲載の拙稿「西郷局の出自と構江屋敷」では、4通のうち「先祖覚」を検討したが、今回は残る3通を逐条的に検討した。その結果、『お国文書』4通はいずれも信憑性を認めることができ、徳川秀忠生母の従姉妹であるお国の一家が、周囲の農民から屋敷地を侵食され没落していったことが明らかになった。同文書が書かれた17世紀半ばは、本百姓層が土豪百姓に取って代わる時代とされるが、同文書からも本百姓層が社会的・経済的に上昇する動きの一端をうかがうことができる。

### はじめに

『静岡産業大学情報学部研究紀要』第18号に掲載された拙稿「西郷局の出自と構江屋敷について」（以下、前稿と略す）で、西郷局が三河国東部の豪族である西郷氏の養女として徳川家康の側室になったとする『寛政重修諸家譜』以来の通説を否定するとともに、局が家康から遠江国上西郷村（現掛川市上西郷）に構江屋敷を賜ったことを示した。その論拠として、西郷局の従姉妹に当たるお国という女性が記した文書を取り上げ、そのうちの「先祖覚」については逐条解釈した。本稿は、残る3通についても全文を紹介し、その記載内容が信じられることを示すとともに、『お国文書』全4通が記された背景について考察する。

### 一、『お国文書』各通の検討

まず、各文書の釈文を枠で囲った中に示し、その後で逐条的に内容を検討する。釈文は前稿の「先祖覚」と同様、東京大学史料編纂所所蔵の影写本によった。文書名は筆者が仮に付けたものである。なお、「先祖覚」については前稿でも全文を示したが、訂正すべき箇所があったので、改めて全文を載せた。

(1)「奉行所宛上申書」(文書(ア))について

乍恐以書付を申上御事  
一上西郷村 御阿いこ様御先祖之者  
御屋敷守ニ被仰付候間未罷在申候  
今様ハ御慈悲之御天下様ニ御座候間  
御先祖様御氏神五社大明神様並  
弓箭八幡様両宮ハ御阿いこ様之  
御氏神ニ而御座候亦曹溪山法泉寺ハ  
御いはい所之寺ニ而御座候并上西郷村ハ  
高千六百五十九石四斗貳升之取ニ御座  
候惣百姓下々之者迄も我等ニ恨事  
候故ニ申上く儀又御触ニ御座候は口上ニ而  
委可申上候御事

遠州佐野郡上西郷村

正保二年西ノ お国(判)

三月二十日

御奉行所

冒頭は、上西郷村の御阿いこ様(西郷局)の御先祖の者、つまり局の父の戸塚五郎大夫が屋敷守を仰せ付けられて、今も五郎大夫の子孫つまりお国が屋敷にいと記していて、前稿で検討した「先祖覚」と内容が一致する。

次の「今様は御慈悲の御天下様に御座候間」がこの個所に記された理由はわからないが、文書後半に奉行所に訴える記述があることから、奉行所の「慈悲」を求めているのであろうか。

その後に出てくる「五社大明神」「弓箭八幡」はともに西郷局が賜った屋敷の近くに現存する。「曹溪山法泉寺」は西郷局の兄弟である心翁が住職を務めた寺で、やはり現存している。上西郷村の石高は元禄期に約1678石<sup>ii</sup>であり、おおむね合致する。

「惣百姓下々の者までも我等に恨み事候」というのは後述するが、お国一家が地元の百姓たちから何らかの恨みを買って問題が生じたためお国が訴え出たことがわかる。その上で、奉行所から指示があれば、口頭で詳しく申し上げますと、記している。

宛先の奉行所は掛川藩内の部署であろうか。

(2)先祖覚<sup>iii</sup>(文書(イ))について

先祖覚

一遠州上西郷村戸塚五郎大夫と申者ノ娘  
相国様御局へ御奉公ニ出し申候 相国様とハ  
権現様之御事にて御座候  
一戸塚五郎大夫娘名をハおあい子と申し是を  
権現様江と召出其を後御台ニ御直被成候

其時ハおあい子ヲ名をハ西郷と被仰付候其節にハ  
遠州浜松之御城ニ被成御召候御事  
一其以後西郷へ屋敷被下堀橋被仰付構屋敷とて  
今ニ居申候是遠州佐野郡上西郷村にて候  
三千石  
一西郷局父ハ戸塚五郎大夫即権現様より五百石被下候。  
此五郎大夫ハ西郷屋敷預りまもり候其後五郎大夫  
妹請ヶ取御守被仰候又其後ハ娘お国請け取り今も此屋敷守り申候  
三千石  
一戸塚五郎大夫世倅同五百石取継ぐとて、戸塚四郎左衛門と申候  
其子作右衛門鷹師町ニ居申候今又若代にて候  
卯ノ  
十二月十六日 お国

「先祖覚」については前稿で検討したので、解釈は省略する。ただ、前稿では第3条の最初の行を「堀構仰せ付けられ」と読んだが、この「構」と読んだ文字は、続く「構屋敷」の「構」字とは明らかに異なるため、本稿では「堀橋」と改めた。このほかにも前稿から改めた個所があるが、大意は変わらない。

なお、文末の「卯」は前稿で示したとおり寛文3年（1663）と考えられる。

### （3）「お国上申書」<sup>iv</sup>（文書(ウ)）について

覚  
一四十一年以前 台徳院様御上洛還御  
之砌遠州懸川博労町ニ而乍恐以  
書付を以申上候石谷十蔵殿に御披露ニ而  
之時 御上覧被成為上意駿河之  
田中迄私ニ可参上由石谷十蔵殿迄被  
仰付候其時私も金屋迄罷越候へども折節  
大井川ノ水増し渡り不定ニ見へ申候故無  
是非金屋ニ留り申候其節為上意ト  
田中之在ニ尋可申由被仰付候而尋申候  
其間右申通水増し候故金屋ニ居申候無  
其後ニ伺奉候明ル月二日に江戸へ御下り被成候故  
相延申事ニ候  
一明ル年九月四日ニ江戸へ罷下右之様子井上  
主計殿迄一々申上候而主計殿も可申上由  
御請合候処近時主計殿死去故無是非体  
一其後拾九年以前紀州様江書付を以  
申上候是御覧ニ被成候其時大分御金

拝領仕候其御金故近年迄ながらへ罷在て候  
何共患とハ飢ニ存候故如此乍恐申上候御事

卯

極月十六日  
之書付多かた如此之

お国

この文書の「卯」も寛文3年（1663）であることは前稿で示した。

まず、第一条を検討する。寛文3年より41年前の元和9年（1623）の徳川秀忠の動向について『徳川実紀』をみると、5月12日に江戸城を発って6月8日に上洛。世子家光が京都で將軍宣下を受けた後、7月21日に京都を発ち、9月7日に江戸城に帰っている。

『徳川実紀』は、この年の秀忠の上洛の行程は詳述しているが、江戸への帰還は出発日と帰城日を記すだけである。しかし、お国が秀忠に拝謁しようとして駿河国田中（現藤枝市）に赴こうとして、大井川の増水によって断念したのは、秀忠が京都から江戸に帰る途中の8月のことと考えてよいであろう。

お国の書付を秀忠に取り次いだ石谷十蔵は、後に島原の乱の副使や江戸町奉行などを務める石谷貞清のこと。石谷氏は貞清の祖父政清までは遠江国西郷村の郷土であり、お国の叔父で西郷局の父戸塚五郎大夫が石谷氏に属していた。このことは林鷺峰が貞清について記した「故江府ノ令朝散太夫親衛校尉石谷叟行状」に「（今川義元が遠州を支配下に置いた際）政清其ノ麾下ニ属シ、西郷十八士ノ長ト為ル。戸塚氏モ亦其ノ一也」とあって明らかである。

つまり、お国は戸塚氏と石谷氏との古くからの関係を頼り、秀忠に従って帰洛途中に懸川（掛川）を通った石谷十蔵に、取次ぎを頼んだのであろうと推測できる。

第二条は、この翌年にお国が江戸に井上主計を訪ね、秀忠に会えなかった事情を説明し、主計もこのことを秀忠に申し上げようと受け合ったが、主計はその後亡くなってしまったので、仕方がなかったと記す。

井上主計とは井上主計頭正就を指す。正就は、元和10年当時は後の老中に当たる「奉行入」であり、同8年に遠江横須賀藩主（5万2千余石）になったばかりだった<sup>vi</sup>。横須賀城のあった旧大須賀町（大東町を経て現在は掛川市）から発行された『大須賀町誌』<sup>vii</sup>によると、正就の父井上半右衛門の妻は秀忠の乳母だったという。お国が正就を頼った理由は、秀忠を産んだ西郷局と秀忠の乳母だった正就の母の縁を頼ったのかもしれない。

ただ、管見の範囲では、正就の母が秀忠の乳母だったという記述は『大須賀町誌』以前には見られない。しかし、正就は寛永5年（1628）に西郷局の三十三回忌を永井尚志らとともに「奉行」している。このとき西郷局は従一位を贈られ、葬られた駿府の龍泉寺が宝台院と改められた<sup>viii</sup>。このような機会に、お国が正就の面識を得たことは想定することができ、お国が正就を頼ったことも理解できるであろう。

ところが、この文書が記すように、正就はまもなく死去してしまう。つまり寛永五年（1628）に目付豊島信満に江戸城西の丸で刺殺されてしまうのである。

第三条は、寛文3年より19年前の正保2年（1645）に紀伊頼宣に書付を提出したところ、かなりの額の金子を拝領し、その金で「近年まで長らえ」という。その上で「患いとは

飢えに存じ候」と、苦しい生活状況を述べている。

頼宣による援助については、次の文書（エ）「頼宣宛上申書」に詳しく出ているので、そこで検討する。この文書（ウ）には宛先がないため、どこに出されたのか（もしくは出そうとしたのか）は不明<sup>※</sup>。

末尾の一文「之書付…」は、この文書を写した者の記載であろう。この一文によって、東大史料編纂所が影写した文書は写しだったことがわかる。原本の所在は明らかではない。

#### （４）「大納言宛上申書」<sup>※</sup>（文書（エ））について

乍恐御訴訟申上候御事  
一去ル貳拾年以前酉之年御下向之節  
以御目安申上候宝台院様御出被成候  
御屋敷守ニ罷在候者様子ハ新坂町之  
御宿片岡金左衛門ニ委細御尋ニ被成ニ付  
明戌ノ年御上国之刻於新坂  
御銀拝領致頂戴難有奉存上候  
其刻重而ハむさと罷出問敷旨被為成  
御定にと御宿片岡金左衛門申渡候に付  
罷出御礼不申上候其以御金田地ヲ買  
飢命猶罷在候以前ハ西郷村之者共  
めし不仕候処に近年ハ村之者共御地頭  
方へも色々之様申しなし○屋敷の内を荒○買い申す田地をも申  
かすめわけとられ無念の仕合ニ奉存候  
一か様之儀を御通り之刻御うつたえ可  
申上と度々御宿金左衛門方迄申上共  
尚御定ニ而無用と申候ニ付  
罷出不申上候私老体之儀ニ御座候へは  
明日をも存不申候間此度御こしの  
内拝上仕度奉致罷出候御事  
一願ハ倅共兄弟御座候  
以御慈悲飢不死罷  
在候様ニ奉仰御事  
右之趣奉仰御定候 以上

上西郷村

辰三月

お国

大納言様

御用人衆御披露

この文書の「辰」は、寛文４年（1664）であり、とすれば第一条の「去る二十年以前酉の年」というのは正保２年（1645）となる。

第一条は次のような意味になる。

正保2年に紀伊頼宣が江戸に赴く途中、目安（書状）で「宝台院様（西郷局）がいらいしたお屋敷を守っている者でございます」と申し上げたところ、頼宣は詳細を新坂（日坂）町の本陣の片岡金左衛門にお尋ねになられた。翌戌の年に頼宣が紀伊に赴く際、日坂宿で銀を拝領し、ありがたく存じました。

そのとき、むやみに（頼宣の）御前にまかり出るべきではないとお決めになられていると、金左衛門が（お国に）申し渡したため、お礼も申し上げませんでした。拝領したお金で田地を買うことができ、飢えた命はまだ尽きていません。

以前は西郷村の者どもが（お国一家を）使役することはありませんでしたが、近年は村の者どもが領主（掛川藩）のところに色々と告げ口し、屋敷のうちを荒らされたり、買った田地をかすめ取られたりして、無念でございます。

『南紀徳川史』によると、頼宣は正保2年3月19日に和歌山を出発し、4月2日に江戸に到着している。また、同年9月20日に江戸を発ち、10月6日に和歌山城に着いている<sup>xi</sup>。お国が頼宣に書状を提出したのは江戸に向かう途中の3月のことであろう。

頼宣は翌年4月14日に紀伊を出発、同25日に江戸に到着している<sup>xii</sup>。この年に頼宣が日坂を通ったのはこの時だけとみられることから、お国宛てに銀を贈ったのは正保3年4月としてよいであろう。

この第一条は、文書（ウ）第三条に「十九年以前、紀州様へ書付をもって申し上げ候。是ご覧になられ候その時、だいぶ御金拝領つかまつり候。その御金ゆえ近年までながらえまかりあり候」と記した状況について、詳しく述べたものと考えられる。

日坂宿の片岡金左衛門は、屋号を「扇屋」といい代々同宿の本陣を世襲していた<sup>xiii</sup>。

第二条の内容は次の通り。

西郷村の者どもの仕打ちについて、頼宣が紀伊から江戸に帰る際に訴えようと、たびたび金左衛門に申し上げたのですが、お定めで禁止されていることから「無用」と申しますので、御前にまかり出ることはいたしませんでした。

私は老体で明日をも知れぬ命ですので、このたびお越しなさるとき、拝謁いたしたくまかり出でました。

お国としては、西郷村の者どもの仕打ちについて、頼宣に会って訴えたかったのだが、片岡金左衛門が止めたので果たせなかった。しかし、お国は「明日をも存じ申さず」というほど年を取ったので、今回は是非とも頼宣に会いたいと訴えている。

第三条は、お国一家を飢え死にさせないように頼宣から指示してほしいという、お国の切実な訴えである。

頼宣は寛文4年3月4日に江戸を発ち、同18日に和歌山城に入っている<sup>xiv</sup>。この文書の日付「辰三月」というのは、まさに頼宣が東海道を紀伊に向かっている最中であり、高齢のお国はこれを最後の機会と考えて文書を書いたのであろう。

お国がなぜ頼宣を頼ったのかは不明だが、頼宣は元和5年（1619）まで駿府藩主だったので、お国は紀伊藩の家中に知り合いがいてその伝手を頼ったのかもしれない。

#### （５）４通の関係

以上全４通の『お国文書』について検討したが、文書に記された年次と秀忠、頼宣の動

静はいずれも合致することを示すことができた。また、文書に登場する秀忠、石谷貞清、井上正就、頼宣はいずれも人名事典に登場するほどの有名人であるが、頼宣を除いては西郷局と何らかのゆかりある人物であり、お国が頼りにしたことも頷けるのではないだろうか。

4通とも文書の実物は見つかっておらず、奉行所や頼宣に差し出された文書の控えなのか、それとも実際には出されなかったのかは不明である。しかし、記された内容に大きな矛盾がみられないことから、いずれも信用できる文書だと考える。

4通の関係について検討すると、文書（イ）（ウ）は全く同じ日付であり、同じ目的のために書かれたと考えられる。ただ、前稿で指摘したように、（イ）はずっと以前に書いたもので、それに「卯ノ十二月十六日」という日付を加えた可能性も考えられる。

また、文書（エ）は（イ）と（ウ）の翌年に書かれたものであることは、（ウ）の「十九年以前にお国が頼宣に書付を提出した」という記述と、（エ）の「二十年以前にお国が頼宣に目安を提出した」という記述が同じ出来事を指していると考えられることから、明らかである。従って、文書（ウ）と（エ）は、高齢になったお国が、一家の将来を案じて記したと考えられる。（イ）は（ウ）の添付資料として用意したのであろう。

文書（ア）は（イ）（ウ）より18年前、（エ）より19年前に書かれていて、文書を記した動機は異なるとみられるが、詳しくは後述する。次章では、この4通から見てくるお国一家の動向について考察する。

## 二、お国一家の動向

### （1）横須賀藩主井上氏との関係

お国が寛永元年（1624）に江戸で井上正就に会い、お国が秀忠に会おうとして断念したことを伝え、正就はこのことを秀忠に言上することを請け合ったと、文書（ウ）に記されていることは、既に見た通りである。

同文書では、正就が死去したため「是非なき体にて御座候」とだけ記されているが、寛永元年から同5年の正就刺殺事件までは約5年経っていて、正就はその間、お国との約束を履行しようとしなかったのだろうか。

文書（ア）は正保2年（1645）に書かれているが、この正保2年には正就の跡を継いで横須賀藩主となっていた正利が、常陸国笠間藩に転封となっていることから、推測をしてみたい。

お国が正就と会い正就が秀忠に報告することを請け合った後、正就は秀忠に報告して、秀忠からお国に援助するよう命じられたのではないだろうか。横須賀藩領はお国のいた遠江国佐野郡と隣り合っていたため、上西郷村のお国のもとに物資などを届けるのに都合がよかったであろう。なお、寛永元年当時の掛川城主は秀忠の弟忠長の付家老である朝倉宣正であり、秀忠としては若い頃から近侍していた正就の方が気軽に命令できたと考えられることができる。

そして、正就の死後も正利が援助を続けていたが、笠間への転封によって今後は援助できなくなる旨、横須賀藩からお国に伝えられたのではないだろうか。

お国は井上家からの援助打ち切りに危機感を抱き、「惣百姓下々の者までも我等に恨み



事候」(文書(ア))という上西郷村での孤立状態をなんとか解消しようとして、地元の掛川藩(正保2年当時の藩主は松平忠晴)に訴え出たのが、文書(ア)なのではないか。「今様は御慈悲の御天下様に御座候」という一文からも、「現在の苦境を何とかしてもらいたい」という切実さが感じられる。

## (2) お国一家孤立の原因

なぜお国一家が周囲の農民たちに「恨み」を買うようになったのか、具体的に示す史料は見当たらない。ただ、文書(エ)に「近年は村の者ども御地頭方へも色々の様申しなし、○屋敷のうちを荒し○買い申す田地をもかすめわけとられ」とある。このことから、農民たちは地頭つまり領主である掛川藩の許可または黙認の上で、お国の屋敷内を荒らしたり、紀伊頼宣から拝領した金で買った田地を掠め取っていたことがわかる。

お国が預かっていた構江屋敷の広さは不明だが、屋敷の西限とみられる倉真川から東門と考えられる「トウモン」という地名まで東西約200メートルあり、広大な敷地だったことがうかがわれる。構江地区とその周辺は平地が広がっていて、現在も多くの水田がある。お国の時代の農民たちも広大な構江屋敷を耕作適地とみていたとしても、納得できるであろう。

しかも、文書(イ)にみたように、屋敷守は戸塚五郎大夫の後はその妹、その後はお国と女性が続いている。中世土豪の末裔が庄屋などとして地域の開発の中心となったケースは多いが、お国一家の場合は当主に女性が続いたこともあってか、農民たちを指導して開発を主導した形跡はみられない。西郷局との縁を言い立てて井上正就や紀伊頼宣らの有力者に頼っているばかりである。

とすれば、農民たちが女性の当主を侮り、屋敷の土地を徐々に侵食していったと考えられないだろうか。前稿でも記したように、お国が実家である旗本の戸塚家と疎遠になっていたとみられることも、侮りを受けた一因かもしれない。

一方、掛川藩としては領内の耕地が増えることは望ましいので、農民たちによる侵食を黙認していたと推測できよう。お国文書の時期(正保2年～寛文4年)は、掛川藩主が次々に交代している<sup>xvi</sup>ので、たとえ藩が農民たちの行動を抑えようとしても、藩主が代われば再び侵食を進めたとも考えられる。

## (3) お国一家の没落

文書(エ)でみた紀伊頼宣に対するお国の嘆願が、どのような結果だったかを示す文書は残っていない。しかし、以下に挙げる史料から、お国の子孫は構江で続いていたが、それは將軍生母の一族にふさわしい有力者としてではなく、一農民としてだったことがわかる。とすれば、お国の嘆願は効果がなかったと推測できる。あるいは、お国は頼宣への上申書の下書を書いたものの、実際に提出するまでにはいたらなかったのかもしれない。

構江屋敷やお国の子孫がその後どうなったかをみると、まず、『掛川誌稿』巻二「上西郷村」の「西郷斎宮故宅」項は、構江屋敷について「明和年までは、土手なども残りしといへど今はなし」と記していて、明和年間(1764～1772)までは屋敷の名残として土手などがあったが、その後は屋敷の痕跡もなくなっていたことがわかる。

また、同じ「西郷斎宮故宅」項に、お国の叔父で先々代の屋敷守だった富塚五郎大夫の



註記に「其子孫今構村の甚右衛門なりと云」（富塚五郎大夫は戸塚五郎大夫のことで、その子孫は構村つまり構江村の甚右衛門という者だという）と記している。同項はさらに、「今惣太夫、甚右衛門と云百姓構村の内に居れり」とも記し、甚右衛門が構江村の百姓になっていることがわかる。

甚右衛門の名は、元文5年（1740）7月付の「遠州佐野郡上西郷村五人組帳」<sup>xviii</sup> にも見えるが、「作右衛門組」の一員としてである。ということは、甚右衛門は庄屋である作右衛門配下の百姓であり、庄屋を務めるような有力者ではなく、一農民だったことになる。

## おわりに

4通の『お国文書』は、前稿でも指摘したように『静岡県史』<sup>xix</sup> や『掛川市史』<sup>xx</sup> に採られることはなかった。また、戦前に郷土史家として活躍し、東京大学史料編纂所による『お国文書』の影写本作成に協力した山崎常磐<sup>xxi</sup>も、この文書の信憑性には必ずしも確信が持てなかったようだ。山崎は、西郷局の出身地に絡んで「此四通ノ古文書ヲ正確ノモノトセバ此ノ上西郷村ヨリ出タルニ似タリ。右就レヲ正シトスヘキカ御高見御洩シ願上候」、つまり4通のお国文書が正確なものとすれば西郷局は上西郷村から出たとしてよいが、（西郷局が上西郷村出身なのか、そうではないのか）どちらが正しいと考えたらよいのか、ご意見をいただきたく願います、と田中義成東京帝国大学教授に尋ねる手紙を大正2年2月7日付で書いている<sup>xxii</sup>。

しかし、本稿で示した通り、『お国文書』に記された秀忠、頼宣らの動向は『徳川実紀』などと符合する。また、前稿で見た文書（イ）「先祖覚」の戸塚氏当主が文書の書かれた時期に合わない点も「お国と旗本の戸塚氏は疎遠になっていた」という説明が可能で、この説明はお国一家が孤立したことの説明にもなる。

つまり、4通の『お国文書』の記述内容に矛盾はなく辻褄が合っていると考えてよいであろう。とすれば、江戸時代前期の歴史を考える上で、同文書は活用されなければならない。

お国文書の書かれた寛文期頃は、「多くの地域では、土豪百姓ピラミッド型村落からほぼ同規模の名請百姓の村落へと変化を遂げた<sup>xxiii</sup>」時期に当たる。寛文期には中世以来の伝統を持つ開発領主ですら本百姓（名請百姓）層の勢いに押されていたとすれば、将軍秀忠の生母の縁者とはいえ、もとは西郷氏（後に石谷と改称）の配下にすぎなかった戸塚氏の一族で、特に地元の開発に尽くしたともみえないお国の一家が、孤立し没落していったというのは理解しやすいことであろう。『お国文書』は、上西郷村の本百姓層の成長をものがたる貴重な史料といえることができるのである。

## 註

<sup>i</sup> 東京大学史料編纂所影写本の文書名は「佐野郡上西郷村お国上申書」

<sup>ii</sup> 『元禄高帳による元禄期遠江国石高帳』（磐田市誌編纂室、1976年刊）による。

<sup>iii</sup> 東京大学史料編纂所影写本の文書名は「先祖覚書」

<sup>iv</sup> 東京大学史料編纂所影写本の文書名は「お国上申状控」

- v 『近世儒家文集集成』第十二卷『鷲峰林学士文集』下（ぺりかん社、1997年刊）
- vi 『寛永諸家系図伝』第三（続群書類従完成会、1980年刊）「井上（清和源氏頼末流）」の正就条
- vii 『大須賀町誌』（1980年刊）58ページ
- viii 『徳川実紀』「大猷院殿御実紀」寛永五年五月十九日条。本稿で『徳川実紀』は『新訂増補国史大系』（吉川弘文館）によった。
- ix 前稿で「（先祖覚と）一緒に奉行所に提出した」と記したが、訂正する。
- x 東京大学史料編纂所影写本の文書名は「上西村お国訴状控」
- xi 『南紀徳川史』（堀内信編輯、南紀徳川史刊行会、1930年刊）第一冊卷之三「南龍公第三」正保二年の項
- xii 前掲『南紀徳川史』「南龍公」正保三年の項
- xiii 『掛川市史』中巻（掛川市、1984年刊）「日坂宿の成立の経過」501、506ページ
- xiv 前掲『南紀徳川史』「南龍公」寛文四年の項
- xv 第五条の戸塚氏の系譜を記した個所で、「若代」が寛永5年に病死した之末、または寛永14年に仕出した忠次と考えられると、前稿に記した。いずれにしても、寛文3年より20年以上前のことになる。
- xvi 『新版角川日本史辞典』（角川書店、1996年刊）「近世大名配置表」によると、この間の約20年間に、掛川藩主は松平（藤井）忠晴—北条氏重—井伊直好と替わっている。
- xvii 名著出版、1972年刊
- xviii 『掛川市近世史料集』第四号（掛川市、1978年刊）所収
- xix 『静岡県史』通史編3 近世一（静岡県、1996年刊）
- xx 前掲『掛川市史』中巻
- xxi 『掛川市誌』（掛川市、1968年刊）によると、慶応元年（1865）に生まれ、井伊谷神社宮司、遠江郷土研究会会長、静岡県史蹟名勝天然記念物調査員などを務め、昭和29年（1954）死去。
- xxii 淡山翁記念報徳図書館（掛川市）蔵『山崎常磐文書』。線で消した個所があり、また意味が通じにくい個所もあるので、常磐が書いた手紙の下書きと考えられる。なお、この史料については、同図書館の目録作成に携わっている佐藤四郎氏から御教示いただいた。
- xxiii 『法政史学』第四十八号「近世社会における『旧記』の成立」（岩橋清美）66ページ。なお、佐藤孝之著『近世前期の幕領支配と村落』（巖南堂、1993年刊）「北遠地方における『公文百姓』の解体過程」273、274ページに、寛文13年（1673）頃以降に阿多古領（現浜松市天竜区）で、同地域を開発した由緒を持つ公文百姓（土豪百姓）から分付百姓（本百姓）が自立を目指す動きを示すことが紹介されている。